

【きけ わだつみのこえ】

木村久夫「もう一通の遺書」

戦没学徒の遺稿を集めた「きけ わだつみのこえ」を代表する元陸軍上等兵・木村久夫（1918～1946年）の遺書は、すべて哲学書の余白に書かれたものとされてきたが、実は別にも存在していた。

ここに「もう一通の遺書」と、「わだつみ」では削除された「哲学通論」の書き込みの主要部分を紹介する。

「哲学通論」への書き込みのうち、「きけ わだつみのこえ」で削除された主な箇所は以下の通り。

『日本の軍人、ことに陸軍の軍人は、私たちの予測していた通り、やはり国を亡ぼしたやつであり、すべての虚飾を取り去れば、我欲そのもののほかは何ものでもなかった。』（25ページ）

『(連合軍の看守から) 全く不合理と思えることが、日本では平然と何の反省もなく行われていることを幾多指摘されるのは、全く日本にとって不名誉なことである。

彼らが我々より進んでいるとは決して言わないが、真赤な不合理が平然と横行するまま許して来たのは、何と云っても我々の赤面せざるべからざるところである。

ことに軍人社会、およびその行動が、その表向きの大言壮語にかかわらず、本随は古い中世的なものそのものにほかならなかったことは、反省し全国民に平身低頭、謝罪せねばならぬところである。』（59、61ページ）

『この（見るに堪えない）軍人を代表するものとして東條（英機）前首相がある。

さらに彼の終戦において自殺（未遂）は何たることか、無責任なること甚だしい。

これが日本軍人のすべてであるのだ。』（101ページ）

『彼らの言う自由主義とはすなわち「彼らに都合の良い思惑には不都合なる思想」という意味以外には何もないのである。

またそれ以上のことは何も解らないのである。』

（107ページ）

『軍人が今日までなしてきた栄誉栄華は誰のお陰だったのであるか、すべて国民の犠牲のもとになされたにすぎないのである。

労働者、出征家族の家には何も食物はなくても、何々隊長と言われるようなお家には肉でも、魚でも、菓子でもいくらでもあったのである、－ 以下は語るまい、涙が出てくるばかりである』

（109、111ページ）

『天皇崇拝の最もあつかったのは軍人さんだそうである。（略）。いわゆる「天皇の命」と彼らの言うのはすなわち「軍閥」の命と言うのと実質的には何ら変わらなかったのである。

ただこの命に従わざる者を罪する時にのみ、天皇の権力というものが用いられたのである。

もしこれを聞いて怒る軍人あるとするならば、終戦の前と後における彼らの態度を正直に反省せよ。』（113、115ページ）

↑ 「哲学通論」への書き込みのうち、「きけ わだつみのこえ」で削除された主な箇所は以上の通りです。

地下より祈るを楽しみとしよう

《こころの塵の立つぞ悲しき》

この頃になってようやく死ということが大して恐ろしいものではなくなってきた。

決して負け惜しみではない。病で死んで行く人でも死の寸前にはこのような気分になるのではないかと思われる。

時々ほんの数秒の間、現世への執着がひょっくり頭を持ち上げるが直ぐ消えてしまう。この分ではいよいよあの世へのお召しが来ても、大して見難（みにく）い態度もなく行けそうに思っている。何を言っても一生においてこれほど大きい人間への試験はない。

今では、父母妹の写真もないので、毎朝毎夕目を閉じ、昔時の顔を思い浮かべては挨拶している。

おまえたちも目を閉じ、大学生当時の私にでも挨拶しておくれ。安倍先生はお元気か、よろしくお伝えしてくれ。どうぞ挨拶申して良いか適当な言葉も思い当たらない。

(略)

もう書くこととて何もない、しかし何かもっと書き続けていきたい。私のことについては、以後次々に帰還する戦友たちが告げてくれるであろう。何か友より便りあるたびに遠路をいとわず戦友を訪問し、手紙のことを聞いてくれ。私は何一つ不真面目なることはしておらないはずだ。

死んで行くときも立派に死んでいくはずだ。

また、よし立派な軍人の亀鑑たらずとも、日本人としては、日本最高学府の教養を受けた日本インテリ-としては、何ら恥ずるところない行動をとってきたはずである。

ただそれだけは父母への唯一の孝行として残せると思っている。

ただ私に戦争犯罪者なる汚名が凶らずも下されたことがやがて

は孝子の縁談に、また家の将来に何かの支障を与えないかということが心配であるが、カーニコバルに終戦まで駐屯していた人ならば、誰もが皆私の身の公明正大を証明してくれることを信じる。
安心してくれ。 (略)

誰か「ドイツ人」の言葉であったか思い出した。
「生まれざらんこそよなけれ、生まれたらんには生まれし方へ
急ぎ帰るこそ願わしけれ」

私の命日は昭和 21 年 5 月 23 日なり。

私の遺品もじゅうぶん送れないのは残念である。しかしできるだけ
だけの機会をとらえて、多くの人に私の遺品の一部ずつを頼んだ。
その内の幾つかは着くであろう。

英和、和英辞書、哲学通論、ズボン、その他である。また、福
中の叔父さんも私の遺品となるべきものを何か持っておられるか
も知れない、お尋ねしてくれ。

遙か異郷において多少とも血を分けた福中氏を持ったということ
は不幸中の幸いであった。

氏は私のために心から嘆いてくれるであろう。氏に最後お目にか
かって御礼申し上げられなかったことは残念である。よろしく
お伝え申してくれ。

もう書くことはない、いよいよ死に赴く。皆さま、お元気で、
さようなら、さようなら。

- 1、大日本帝国に新しき繁栄あれかし。
- 1、皆さまお元気で、生前はご厄介になりました。
- 1、末期の水を上げてくれ。

辞世

○風も風ぎ 雨も止みたり爽やかに 朝日を浴びて明日は出でなむ。

○ 心なき風な吹きこそ沈みたる心の塵の立つぞ悲しき。

遺骨は届かない、爪と遺髪とをもってそれに代える。

処刑半時間前擱筆す

■ ↑以上書きました【きけ わだつみのこえ：木村久夫もう一通の遺書】は、中日新聞（朝刊）2014年4月29日の記事からその一部を抜粋したものです。

★ 中日新聞2014年4月29日（朝刊）には、一面トップ記事として【学徒兵もう一通の遺書】【「わだつみのこえ」獄中で真情】

二面には【学問に飢え筆握る】【悲劇の学徒兵・木村久夫】

三面には【軍の不条理 克明に】

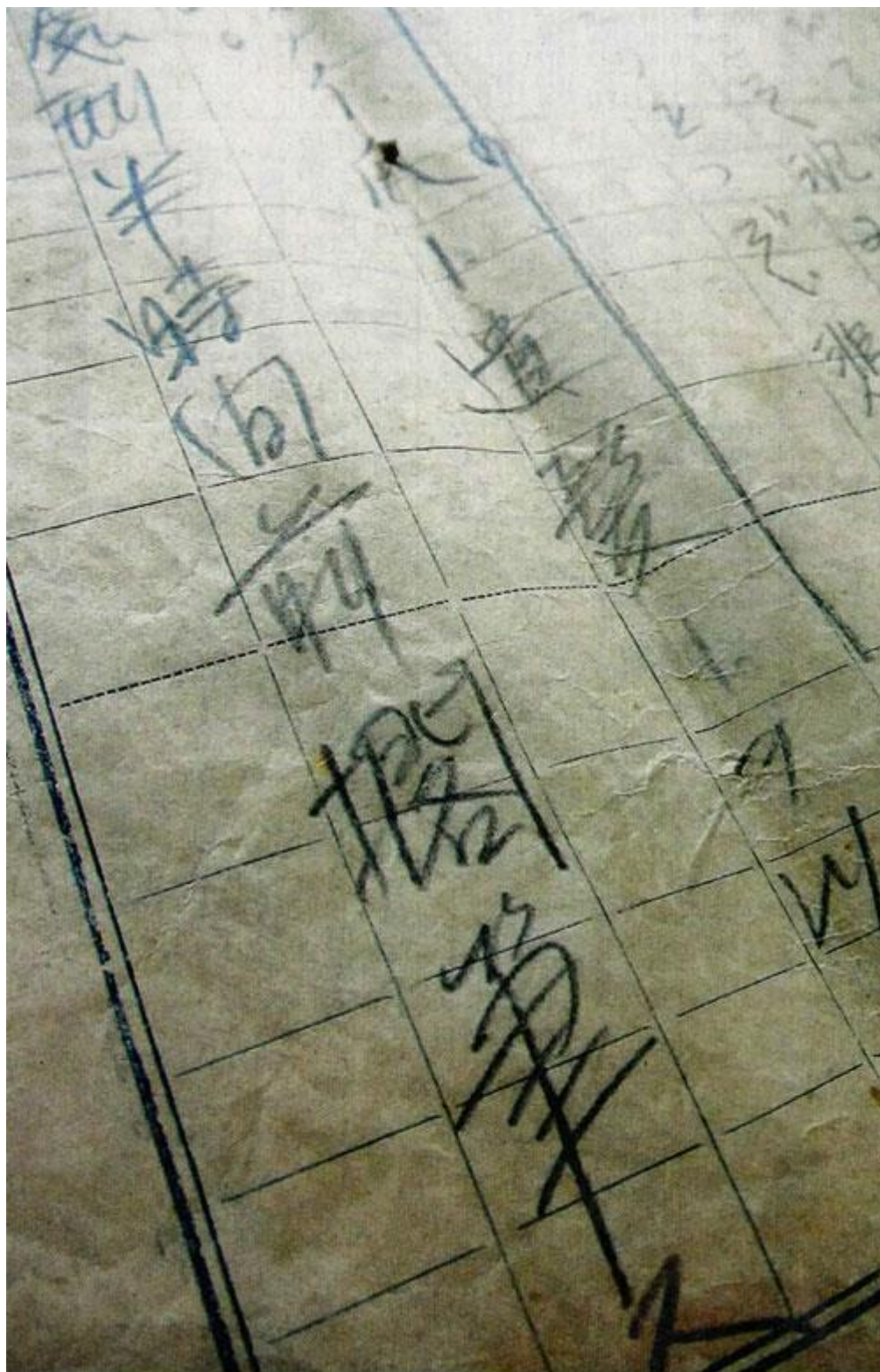
そして、七面には【老いたる父母に不幸お詫びする】【地下より祈るを楽しみとしよう】【こころの塵の立つぞ悲しき】以上の見出しの記事が特集されています。

★ 新聞の写真を拝見すると遺書の末尾に「処刑半時間前に擱筆す」との文字が見えます。

この時になっても驚くべき達筆で書かれた文字には、書くべき言葉もありません。

元陸軍上等兵・木村久夫氏の心情を想うと涙が止まりません。

★軍隊という組織が、いかに不条理・理不尽であり、自らの命のためには部下に罪を負わせることが日常のかつ当たり前のこととして行われていたのかが...? !改めて理解できました。



新たに見つかった遺書の末尾には、「処刑半時間前欄筆（かくひつ）す」とあった。刑場に連れ出される直前までつづったことが分かる